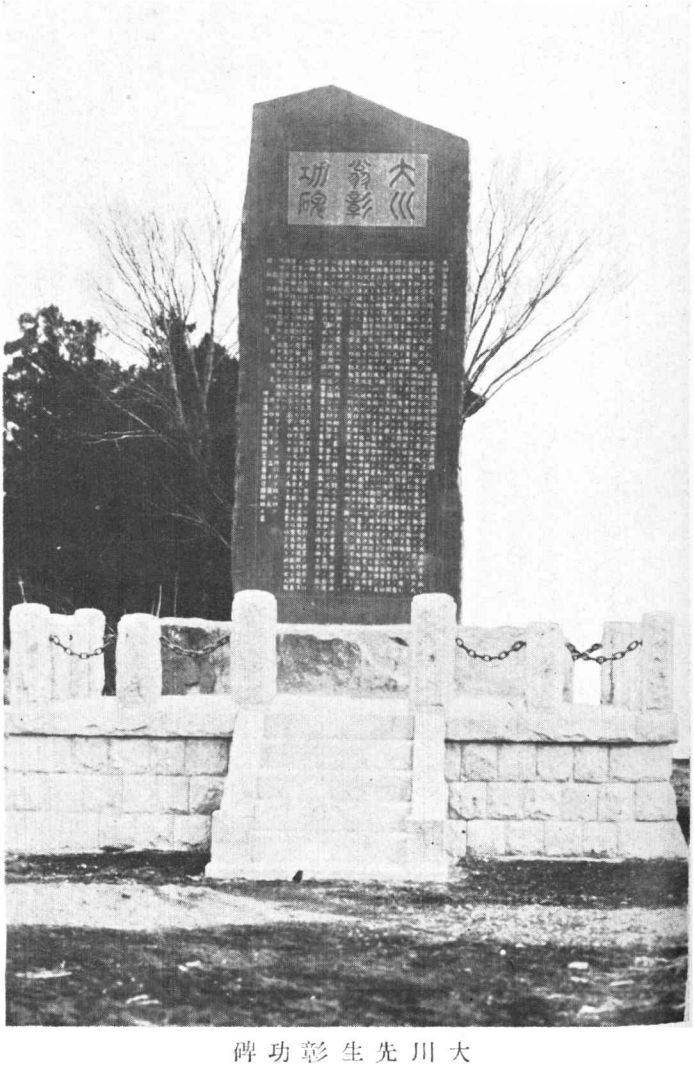
大川翁記功碑除幕式紀念

大川先生出世物語

三芳野村

事務室ニ於ケル大川先生



大川先生彰功碑

志在四海而尚
恭儉心包宇宙
而世鶩登

大正乙亥初夏

楊增銘走

大川平三郎翁彰功ノ記

衆議院議長勲二等粕谷義三題額

古聖曰ク天ノ將ニ大任ヲ是ノ人ニ降サントスルヤ必ス先ツ其ノ心志ヲ苦シメ其ノ筋骨ヲ勞シ其ノ体膚ヲ餓シ其ノ身ヲ空乏ニスト然リ人

能ク此ノ試錬ニ克チテ始メテ大業ヲ成スハ古今東西其ノ軌ヲ一ニス思フニ我カ大川翁ハ即チ亦斯ノ人ナリ蓋シ翁ハ徹頭徹尾勤倫力行ノ人ナリ温良孝悌ノ仁ナリ而シテ愛鄉憂國ノ士ナリ

翁通稱平三郎埼玉縣入間郡三芳野村ノ人其ノ考祖ハ擊劍師範役タリ慈善ヲ以テ聞ユ常ニ人ヲ憐ミテ急ヲ周ヒ乏ヲ賑シ普ク施與ヲ事トス翁ノ幼時家貧ナル實ニ此ニ基因スト云フ妣賢ニシテ獻身家ヲ齊ヘ幼

ヲ育ス翁ノ奮鬪的精神ハ早ク此ノ賢母ノ感化ト貧困トノ裡ニ萌セルナリ而シテ妣ノ生前未タ曾テ翁自ラ收得セル財嚢ヲ開カス常ニ之ヲ妣ノ坐前ニ提供シ妣ノ喜フヲ見テ無上ノ樂ミトセリト云フ洵ニ孝子

ノ範トナスニ足ル翁自ラ曰ク過去五十年奮鬪努力今日アルヲ致ス顧ミレハ此レ全ク母ニ酬イン爲ノ一念ニ外ナラサリキト温良孝悌ノ真情掬スヘキニ非スヤ明治八年翁十七歳ヲ以テ始メテ王子製紙會社ニ

雇ハル勤勉衆ニ超エ才能鋭脱ス職ニ當ツテ誠意機ヲ見ルヤ敏慧考察スルヤ獨創遂ニ根本ノ學ニ志シ勤勞ノ餘暇常ニ寸陰ヲ惜ミテ獨力研鑽更ニ應用ノ道ヲ究ム其ノ刻苦奮勵聞ク者ヲシテ感激ニ堪ヘサラシ

ム後數次海外ヲ視察ス則チ一意專心敢テ他ヲ顧ミス研究亦剴切適確概ネ人ノ意表ニ出ツ天豈是ノ人ニ大任ヲ降ササランヤ翁ノ今日アルハ偏ニ此ノ誠意ト勉勵トノ賜ニヨラスンハアラス翁常ニ曰ク勤勉ナ

レハ則チ實力充實ス勤勉ヲ厭フ儕ハ何ソ論スルニ足ラント以テ其ノ面目ヲ察スヘシ

翁又曰ク人トシテ鄉土ヲ愛スルハ自然ノ人情ニシテ鄉土ニ盡スハ祖先ニ對スル禮儀ナリ忠君愛國ノ根

源亦茲ニ在リト乃チ鄉土ニ於ケル水害豫防ノ途ヲ講シ又耕地整理ノ事業ヲ奬メ其ノ他産業組合ヲ設ケテ農村ノ發達ニ資シ或ハ勤儉力行ノ風ヲ奬勵シ或ハ敎育事業ニ盡シテ青年男女ノ氣風ヲ振作ス村民其

ノ徳ヲ仰キ翁ヲ慕フコト慈父ノ如シ

愛郷ノ人ハ必ス憂國ノ士ナリ翁早クヨリ眼ヲ世界ノ大勢ニ注キ彼我國富ノ懸隔アル因ヲ討ネ産業ノ開發ヲ以テ一大急務トナス翁ノ大事

業ハ實ニ此ノ見地ニ立ツ現ニ製紙業ハ云フモ更ナリ洋灰鐵鋼電力鐵道銀行等幾多ノ事業ヲ起シ日本領土到ル處翁ノ事業ヲ見サルナキノ概アリ翁又五十萬金ヲ投シテ大川育英會ヲ設立シ將來産業方面ニ從

事スヘキ縣下ノ子弟百數十名ヲ養フ翁常ニ曰ク産業ノ為ニ生キ産業ヲ以テ死ス此レ士人報國ノ第一義ナリト以テ其ノ意氣ヲ窺フニ足ルヘシ

嗚呼忠實誠意刻苦勉勵此レ我カ大

川平三郎翁ヲ今日アラシメタル所以ナリ銘ニ曰ク

志感神明　氣起懦夫
功四方洽　名千載永

昭和二年五月

埼玉縣知事從四位勲三等齋藤守圀撰並ニ書

戊辰春日於小石川對水居南軒
翠湖釣人 岡野留夫敬寫

大川先生出世物語

（以印刷代謄寫）

はしがき

大川先生は、現時我事業界の第一人者にして製紙業を初とし製鐵・電力・陸運・海運・拓殖・金融等其關與する事業頗る汎く、日夜國家産業の爲に活動して寸暇なき多忙の身分にも拘らず、愛鄉想土の念溢れて我鄉村の自治・教育・治水等苟も村人の福利增進に關する事業に就ては、寸陰の勞を惜まれず、爲めに貧弱なる我村も漸次富裕となり、村民は深く先生の高德を慕ひ、相謀つて醵金し先生の彰功碑を建て、功名を永久に傳へんとす、今茲除幕の式に際し、其記念として先生の御許を得て、其實歷談を小冊子とし、普く村民に頒つ事とせり、題して「先生出世物語」といふ。先生の宏大なる事歷は、固より此簡單なる紙片の能く盡すべき所にあらざれども、其體驗せられたる處世の一端は、之を窺ふ事を得べく、先生過去の言動は、假令其片鱗たりとも悉く是れ萬世不易の教訓にして、一讀懦夫をして起たしむるの概がある。切に熟讀を乞ふ。

昭和三年三月　　三芳野村大川翁彰功碑建設委員識

目次

○甚しく恥辱を感じた……一
○私の母は賢夫人だつた……三
○心の奥に不思議の感……七
○玄關番をして得た教訓……一〇
○今日ある第一の出發點……一四
○會社に出勤するのも第一番……一七
○字引と首引で物理の研究……一九
○書物を應用に研究……二四
○學んで得た化學の力が實現……二六

○經濟學を耽讀して研究……二九
○世に立つ基礎的學問……三三
○一歩を進み哲學の研究……三八
○スペンサーの議論に感服……四四
○これ無くては世に立てぬ……四八
○勤勉であれば實力は充實する……五二
○米國でやつた努力……五六
○余の洋行論……六一
○第一は學問第二は誠意努力……六七
○金の力と腕の力……七二

大川先生出世物語

『甚しく恥辱を感じた』

出世と云ふことに就ては、僕自身の經驗し來つたことをお話したならば、まさに是れから出世の準備をしやうとする若い人達にとつても、適當なる解決法にならうと考へる。僕は自分の家が非常に貧困であつた爲めに、一日も早く相應の働きをして、兩親を養はなければならぬといふ立場にあつた。かつて母親が全く困つた爲めに他へ金を借りに行つたことがある。その金額たるや第

一回の時が拾圓、第二回目が貳拾圓であつた。その時先方の人の言ふには、

『お前の夫たるものは餘りに働きがないので、困つたものだ。あんなことでは行末どうなるか分らぬ』

といふ如き意味で、父のことをきびしく叱言を言はれた。そこで僕はそれを聽いて非常に情なく思ひ、また非常にくやしく思つて、一日もかうしては居られぬ、早く人の厄介にならずに暮しのたつやうにせねばならぬとヒドく感じた。その時、父の意氣地ないことを罵られたのは、激勵の言葉に相違ないが、僕としては甚だしく耻辱と

感じた。今日に於てこそ激勵の言葉であつたとして感激の心をもつて居るが、しかしその時はけしからんといふ氣持がした。これは青年の氣持としては當然のことであらう。

そこで僕は學業を拋擲して、いくらでも月給を取りたいといふ考へをもつて幸ひその當時王子製紙會社が創立せらるゝことになり、繪圖引に雇はれ、五圓の月給を貰うことになつたのである。

『私の母は賢夫人だつた』

これまでも度々話したことでもあり、僕の口からいふのもおかしなものであるが、僕の母親は全く眞實の賢婦人であつた。僕の家は撃劍の師範役として、三千の門弟を有してゐた。毎日人の出入が多く、相應に收入はあつたが、祖父の大川平兵衛は極端な慈善家で、あはれなお話を聞くと、懐中無一物になるまでこれを救はねばならぬといふ氣質の人であつた。その氣質をよく呑み込んで絶えず無心を申込んで來る奴があつた。これを祖父は悉く受けて斷ることをしなかつた。僕の家が非常に貧しかつたのはこれが爲めである。

祖父が沒して後は父が擊劍の師範役をうけついで居たが、時勢が變つて最早擊劍などを學ぶ人がない。竹刀をもつ術の外何も知らない父としては、どうして今後の暮を立てゝ行くかといふ、悲慘なる境遇に陷つたのは寧ろ當然のことであつたのである。

さうした境遇のうちに吾々兄弟は育てられて來たのであるが、母は嫁に來てから、僕が相當の暮をすることの出來るまでといふものは、とうとう一枚の着物をも拵えずに終始した。そして吾々の着物には母親の着物を仕立て直して一枚一枚着せて呉れた。足袋から、下駄の鼻

緒までも母の手一つで拵へて呉れて、女中一人置かずにやつて來た。夜寢る前には、家が貧乏で風呂を立てる譯にもゆかぬから、湯を沸して、兄の顏を洗ひ、次に僕の顏を洗つて、その次に弟の田中榮八郎の顏を洗つて、同じ湯で又順番に足を洗つて呉れて寢かして呉れたが、榮八郎など戰をきらしてヒーヒヽと言つて泣いたものだ。そして毎晩の如く、九ツ(今の午後十二時)八ツ(二時)になるまでも僕達の爲めに母は足袋を拵え、下駄の鼻緒を拵えて呉れる。それを子供達が今度は僕の足袋だ、今度はお前のだと言つて喜びながら見てゐたものである。と同時に

母親が夜寢ずに僕達の爲めに、あゝやつて足袋や、鼻緒を拵えて呉れるのが有がたいといふ感じが、子供心に浸み渡つた。不思議なことには、それが六ツ七ツの頃の出來事であるが、餘りに深く感じて、その感じが强かつた爲めに、その當時、母の拵えて呉れた下駄の鼻緒の形から色合までを僕は今にハツキリと記憶して居る。

『心の奥に不思議の感』

段々育つてゆくうちに、益々貧乏暮しの事實が詳細に分つて來る。どうか自分が早く一人前になつて暮しの

立つやうにしたいといふ感じが強く起つて來ると同時に又、不思議の感じが心の奥底にあつた。それは斯樣な貧乏を引受けてゆくのは苦しい、大變なことだ。願くば何時までも子供でゐたいといふ、全く正反對の撞着した考が頭にあつた。しかし左樣にして吳れた母だ、自分は月給をとつて、いくらでも母を助けやうといふ考の方が無論非常に強く、斷然學業を捨てた。爾來殆んど五十年非常に働いて、漸く今日あるを致したが、飜つてその徑路を考へて見ると、全く母に酬ゐんとして働いた結果に外ならない。即ち母親に對する孝心が僕自身の測るべか

らざる利益になつたのである。母は七十一歳で沒したが、母の存生中僕は自分の收得して來た金を、一遍でも自分で金包みを繙いたことがない。その後支配人となり、專務となりして立派に暮してゐたが、その時までも自分の收得した金は總て母の前に提供して、母をよろこばせるを以て無上の樂みとしてゐた。

さういふ譯であつたから嘗つて出入の者が『お宅の旦那樣は養子でせうね』などといふ奇問を發したことがある。といふのは、僕は會社では中心になつてゐても、家では兩親を奥の正座に据ゑ、自分は次の間か、時として

は廊下で小さくなつて飯を食うてゐたからである。その當時はそれを敢て何とも思はず、一笑に附したが、よく兩親につとめたものであつたと、今となつて思ふのである。

『玄關番をして得た教訓』

前に述べた如き事情で、僕は十七歳の時に、奮然學業を拋擲して、澁澤子爵の執事の金子といふにつれられて王子製紙の增田支配人の手に引渡され、月給五圓を貰ふことになつた。これから先の僕のやり方が卽ち出世の途

に就て青年の參考になるのである。勿論自分では食へないから、增田支配人の玄關に居て養つて貰つて、會社から貰つた金は全部母のところへ送つた。そしてこの支配人の家に預けられて、そこの三疊の玄關に坐つた時から、僕の出世に就ての關係を生じて來たのである。卽ち增田氏は自らの居住して居る家の主人である。そして會社の支配人であるから、先づ以て僕はこの小僧の如何なるものであるかといふことを、充分に認めて貰ふことを第一の目的とした。それには僕は居候だが、世間並の居候ではないといふ働きをせねばならぬ。居候振りを

極めてよくして、居候として重寶がられ、同時に會社に行つて勤めるにも感心な小僧だと思はしめねばならぬといふことを、當面の眞面目な目的とした。僕はその時午後三時頃支配人の家に行つたのであるが、暫くにして周圍の狀況を見て、夕方になつて直ちに箒を執り、家中すつかり掃き淨め更に庭に出て掃除を爲し、それが濟むと座敷にあがつてランプをつけ、戸をしめる。お爨が一人居たが、それは勝手元にゐて食物の支度をするのみであるから、僕は翌朝も主人が便所に行つたあとで床をあげ、机の上まで整理して、主人が何か調べものか何かをするに

も差支のないやうにする。かう云ふ風なことを毎日ズツト續けてやつて、主人のお伴をして會社に行き、或る時は又主人の書類を携帶して歸つて來た。かうすれば、この小僧氣のきいた奴だと、どうしても認められる。かう云ふ風に居候するに就ても大に注意してやれば、主人に認められ先づ第一の出世の階段をのぼり得る楷梯に進み得るものである。俺は居候であると自ら輕んずるは大なる心得違ひと言はねばならぬ。

斯くして二箇月ばかり經つてから居候の部屋から出て澁澤子爵の家に行つて書生共に逢ふと、彼らの云ふに

は『どうも君は非常に評判がいゝ、あゝ云ふ小僧が會社に居るのは大きく言へば會社の名譽だと皆褒めて居る』といふことであつた。その時の僕の得意想ふべしである。

『今日ある第一の出發點』

然るにその後工場は完成して機械の回轉を始めたが教師として米國人一名、英國人一名で、あとは全部素人である。それでむづかしい紙漉きの機械のうまく運轉の出來る筈は勿論ない。引受けてゐる教師も間違つてゐ

るが、やらせる人も間違つて居る。況んやその紙漉きの教師たる米國人は、後年僕が米國に行つて或製紙會社に行つたら、その製紙會社の夜番をしてゐた。先方へ行けば先づ夜番に採用せらるべき程度の人を我々は大工場の教師として、仕事をしようといふのだから、旨くゆく譯がない。當時日本人が外國人を崇拜する有樣は、紅毛の人にはどんな事でも出來るといふ程度の信仰心があつた。今日から見れば甚だしく不都合な盲信であるが、時勢が全くさうであつた。その頃にあつては洋行して來ると、何もおぼえもせず知りもしない人でも、海外を見て

來たといふばかりで相當の地位が得られたのである。

僕はその時、機械を運轉する困難の狀況を見て考へた。これは紙漉き機械を自分ですつかり運轉し得る技術を先に習得したものが、この事業の大將の地位を占め得られる。幸ひにさう云ふ考をもつて進んでゐる人がないから、自分が一ツこれに立向はうと決心した。これは今日考えて見るも、僕の今日ある第一の出發點として頗る適當の處置で、着眼がよかつたのである。斯の如きことは如何にも簡單明瞭、自明の理の如くであるが、青年が仕事に打ツつかつたならば、如何なる方面に向ふべきか、先

づそれを篤と考慮することが出世すべき第一の準備として必要である。

『會社に出勤するのも第一番』

僕は前に言つた如き意氣をもつて工場に入つたのだから、會社に出勤するのも第一番だ。六時に皆が來るのであるが、僕は五時に出かけて行つて、機械の運轉の準備をスツカリして、運轉が始まつても絶えず機械の周圍をグル〳〵廻つて故障に氣をつけて居る。一番むづかしい困難の仕事は自分が引受けてこれに當るといふのが

僕の仕事に對する方針であつた。卽ちさうやつて居ると少しむづかしい事があると、僕に相談せねばならぬことになる。

この機械の運轉に從事して僕が最も痛切に感じたのは學問の素養がなくては駄目だといふことであつた。先づ以て蒸汽罐といふものが蒸汽の壓力に耐ゆる力を知らねばならぬ。これをどうして計算するか。蒸氣汽罐の馬力を五十馬力、百馬力といふが、馬力をどう計算すればいいのであるか。抑も一馬力とは馬の力をどうして計算してあるのだらう。車軸の馬力に對する實力を

どうして計算するかといふが如く、事々物々、解決を要する幾多の疑問が湧出るので、痛切に學問の必要を感じた。そしてその學問をどうしたら宜からう。又どう云ふ順序にしてやつたならば宜からうかと、特にその點を考へた。この時に於ける僕の思案が、矢張今日の僕の事業の基礎をつくつたのであるから、青年諸子もこの點をよく讀み、よく味つて貰ひたい。

『字引と首引で物理の研究』

その時に僕は、前述の如き種々な疑問を解決するに一

番近い學問は物理學であると思うた。そこで物理學の楷梯たるべき二つの書物を集めて字引と首引で讀み始めた。昔の洋學者は、例へば伊藤玄朴、桂川甫周などが學問で苦心したのは、字引をすら得ることが出來ず、字引の編纂から自分にしなければならなかつたからである。その苦心談はよく耳にしてゐたが、僕が學問を企てた時に字引は稍や完全なものが存在してゐたから、その字引を片ッ端から引て見る。英語を運用して我々の知識を得る役に立たせる爲めには幾字だけ頭の中に刻み込めば宜いであらうか、人にも聞き、自分にも考へて、結局五千

字だらうと思つて、字引によつて五千字の意味を自分の頭に刻み込まうとした。そしてこれ位のことは、そんなに困難ではあるまい、と考へ、勇氣を鼓舞して出發した。

僕はそれまでABCといふやうなものを人から教はつたことはなかつた。ABCの廿六字の文字は教はらんでも、その時既に知つてゐた。そしてそれ等の文字を組合せて見て、AEIOUが音の土臺であるといふこと、即ち今日いふ母音であるといふことを自覺した。それで此の母音と子音とが結びついて一つの文字が出來てゐる。其のBとEと合つたものはどうしてBEとしか

讀めぬ。BとOと結びついてゐるものはBoーとしか讀めぬといふ發音法を一人で發見した。そして後に人に聞いて見て、僕のきめたことに間違のないといふことをさとり得た。

更に又構成された文章の意味を了解するには、It is a table とか、This is a book とかあれば、それはテーブルであるとか、これは本であるとか云ふ風に、文字をもとに返して意味を解釋するの外はない。さう云ふ譯で、一頁内にある全部の字を知り、字と字との取合せによつて解決を考えるに、漢文の構成法と同じ按排に構成せられてゐる

ことを覺ることが出來た。さうして一部の物理書を讀むに半歳ばかりかかつたが、僕の讀書法は、唯だ讀んで意味を知るばかりでは滿足しない。その書籍の一章一句を讀み終る毎に、卷を掩ふて實際の運用を考へる。書いて示してあるより一歩進んだ實用上に於ける研究を怠らなかつた。實際またその必要があつたのである。然も僕が此の學問をするには、先生はない。先生は卽ち一册の字引だ。辭書を繰つて一頁にある文字全部を引いてしまつて、字の意味を知り、文字の構成を考へ、その意義を知り、更にその應用を考へた。

「書物を應用に研究」

その次に僕は少しむづかしい本を神田小川町から七拾五錢で買つて來た。それは佛人ガノーの大物理書の英譯であつたが、それを一年間に全部讀んだ。先生に教はるのと違つて字引と首引に一册の書物を讀み碎いたといふことが、僕に非常な力をつけた。ガノーの物理書の中に、瓦斯體は壓力を加ふれば正比例に凝縮する、段々壓力を加へて行けば液體となる。瓦斯體が縮小する時は熱を放散して熱くなる。壓力をゆるめる時はもとの

瓦斯體に復する。その時は凝縮する時に放散した熱を反對に吸收して周圍を冷却せしむるものであるといふことが書いてあつた。そこで僕はこの原理を應用すれば氷の製造は容易に出來ると考へた。又室内の溫度を冷却せしめて夏季我々の希望する程度に貯へ得る。卽ち人造氣候がこれによつて出來ると考へた。後年僕は麥酒會社の重役として向島の吾妻工場の建築をやつたが、その時に麥酒の醱酵室の構造を見ると、往年僕の腦裡に描いた原理の應用がその儘そこに實現せられてゐた感じがした。卽ち獨逸から來た機械の構造を見て、昔子

供の時に考へてゐたのが實現したと、自分の想像力のえらかつたことを竊に誇りとしてた。かういふ風に、僕は一章を讀む毎にその應用に就て深く考慮したのである。

『學んで得た化學の力が實現』

そこまで自分に學問をして研究して見ると、これから先の學問を如何にすべきかと次に考へた。僕は物理學によつて、周圍の物體の活動する理由を知ることが出來た。然るに我々の周圍にある物體は一體何であるか、水は何から出來てゐるか、空氣は何で出來てゐるか。この簡

單なものさへはつきり知らなかつた。茲に於て化學の本を讀んでこの周圍の物體に就て知らねばならぬと考へた。

そこで僕の最初に讀んだのがウエル氏の『化學書』である。簡單なものであるが、化學の原理がよく分つた。その次にロスコーの化學書を殆んど全部讀みつくして了つた。そして僕の化學上の知識は大體に完全に出來あがつた。勿論ロスコーと雖も簡單なものであるから專門の事になれば更に專門書を讀む必要があるが、既に基礎的知識が出來てゐるから、それを讀みさへすれば了

解は容易だ。僕はかうして化學書を讀んだが、しかし物體の化合は化學の作用によらずに、矢張り物理的作用卽ち壓力と冷却の力により、機械的に化合し得る如くに、人類の知識は近き將來に必ず進むだらうと考へた。もともと漠たる考へではあつたが、僕のこの考へは現在段々實現せられ、硫酸の製造も接觸法により機械力によつて化合が出來る如くになつたし、近頃では空中から窒素をすら取るやうになつてゐる。人間の知識の進歩は、面倒なる化學的方法によらず、簡單に分子と分子とをつかまへるといふ方面に進むであらうと考へた僕の想像力の

非常に强かつたといふことを誇としてゐる譯である。

『經濟學を耽讀して研究』

次に僕は考へた。日本は如何にも貧乏だ、これを外國の富に較べると餘りに著しい懸隔があるが、抑も或國は富み、或國は貧しいといふのは如何なる原因からであるか、此の貧弱なる日本を英米の如く富有の國にするには一體どう云ふ順序にすべきであらうか。語をかへて言へば、人間と富との關係は如何にすべきであるか、此の解決を求むる爲めには何を讀むべきであらうか、如何なる

本があるだらうと考へ、いろ〳〵先輩にも聞き、本屋を調べて見て、ここに經濟學といふ一つの學問のあることを知つた。そしてウエーランドの經濟學を探し出した。極めて初歩のもので、それを四五箇月で讀みつくした。それからアダム、スミスに取りかかつた。アダム、スミスの議論は殆んど國家的に經濟をよく論じて、學究的でなく、世界の經濟に向つて解決を與へる書き方なので、頗る敬意を表した。更に又ジヨン、スチユアート、ミルの經濟書を讀んで見ると、スミスとは非常にかけ離れた學究的な、學理一片の本で、對照が頗る妙であると思つた。然も

此兩者は極端なる自由貿易論者で、これを讀んで居る間、僕の頭も聊か自由貿易の議論に傾いたけれども、しかし餘りに一つの道理をもつて全體を一貫せんとする說が經濟學として面白くないといふ感じが起つた。その後米國のケレーの書いた保護貿易論を讀んで見ると、國といふものはその國內の生產物をもつて自給自足せねばならぬものである。國家の繁榮をはかるには、自給自足をするにありと論じてあつた。僕はこの二つを研究して惟へらく、兩者ともに非である。凡そ國の經濟なるものはその國の國情に應じて保護すべきは保護し、自由に

すべきは自由にし、國情に鑑み、競爭力に應じて適當なる案を定め、巧妙に採擇してゆかねば一國の經濟は立たぬ。國の經濟を論ずる場合に於て、自由とか、保護とか、總てを統一して、その學理に從はしめんとするは經濟學とは言ひ得ない。アダム、スミスも、スチユアート、ミルも、ケレーも何れの國に於ても、しか爲すべしといふは間違ひである。巧妙なる應用法を敎ゆるのが經濟學の任務で、一つの理論をもつて一貫せんとするは取るに足らぬ愚論であると、その時既に僕は考へたのである。

『世に立つ基礎的學問』

僕は斯の如くにして物理學、化學、經濟學といふ順序に研究して來た。そして實業家でも、誰でもこれだけは知つてゐなければ、世に立てぬ。これが基礎的學問だと考へた。勿論專門家でないから是等の學問の總てを研究して、その蘊奥を極むる必要はないが、その大體を頭に刻み込んで置くことは、今後青年が世に立つに絶對に必要である。第一基礎としてこれだけのことをやらぬと、人として常識の備つた人間にはなり得ない。即ち如何に

誠意があつても、勤勉の人でも、事を處する基礎條件としてこれだけは知つて居て貰はぬと、その誠意も勤勉も役に立たぬ。況やこれなくして自己の榮達をはからんとする如きは木に緣りて魚を求めるの類である。

僕は經濟學を既に研究して行くうちに人生は富の力によるにあらざれば何事をも爲し得ない。そして此の富なるものは親がつくり、その子に遺し、その子は又孫に傳へる。さうして富が段々增殖してゆくといふのが、一般の道理だ。故に人間は時が經つに從つてその富が段段大きくなり、至大の便宜を得る。從つて後世になれば

なる程、人間はえらくなるべき筈だ。又知識に於ても富と同じ譯で、前の人が研究の結果を次の人に教へ、その人が又研究して次へ教へて、段々年代を經るに從ひ、恰も富の增進するが如く、知識も增殖してゆく。そして此の知識なるものは、或は書物に書かれて殘り、或は實物として貯えられ、段々後になるほど人間が悧巧になり、知識が進む譯ではないか。

斯の如くにして富と知識とが廣大になると共に、後代の人は實に驚くべき進歩をすべき筈であるのに、その然らざるには如何なる理由であるか。聞くところによれ

ば、古代文化の進んでゐた羅馬の滅亡した實例すらある。此の如き文明消長のあとを研究することは、何れの方面に於ても貧弱なる日本の前途を研究するに最も大切であると僕は又考へた。そしてこれをどうして研究すればいゝかといふ問題になつた時、外國に歴史學といふものゝあるといふことを知り、バックルや、ギゾーの「文明史」を讀んで見た。日本の歴史は帝王なり、將軍なり、或は偉人の天下を治め、又は戰鬪をしたりしたことを、面白可笑しく書いたのみで、文明の進歩消長などの研究がない。日本の歴史は言はゞ戰鬪の歴史だ。そんなものは講釋

師の講談の如きもので、僕の目的から見れば一瞥の價値もない。ところが外國人の書いた文明史なるものを讀んで見ると、歴史を見る眼が日本人や支那人とは丸で違つてゐる。人類の發達の道理を究むる目的の歴史であつて、戰爭は勿論の事、學者の新說、文藝技術の偉人の出現等に就きて其原因と實際の結果を結び附けて文明消長の原理を論じた眼識は實にえらいものだと深く感じた。その文明論を研究して僕は自分一個の文明論を組み立て、これを文明學と名づけた。福澤先生がその後文明論の概略を書いたが、矢張りバックルなどの文明史がその

骨子であらうと思うた。僕はそれを讀んで先生はえらい方であらうが、その論ずるところは僕と殆んど同じであると心中に滿足した。

『一歩を進み哲學の研究』

次に僕は更に一歩を進めて、自分が將來社會に立つて大に活動する場合に、議論の强い根柢をもつことが必要であると感じた。そこで西洋人のいふ哲學なるものはどんな事を書いてあるか、社會哲學とはどんなものかといふことを研究して見た。古來日本では、哲學などとい

ふ種類のものは、取とめもない空論を唱へてゐるものゝ如く考へてゐたが、西洋人の所謂社會哲學は矢張り事實をとらへ來つた實際の議論で、空漠として唱へられる悟りではない。そのうちの最も興味をもつて研究したのがハーバート、スペンサーであつた。そしてこのスペンサーの議論が、今日僕の政治論の基礎になつて居る。穂積八束博士など獨逸に居た時、僕も紙漉きの研究に行つてゐたが例の知識欲からスペンサー流の議論をすると、君の議論は Radicalism 即ち極端論であると評せられた。當時穂積君などは憲法論を研究され皇室中心主義の博

士一派の學說を組織せんとしてゐたので、スペンサー流で論ずると論據が危くなるが、穗積君などの議論は實際的のもので、僕のは寧ろ學理的の國家論であつたかも知れぬ。極端に過ぎると戒められて、然もその時には首肯し得なかつたが、今日に於て顧みれば矢張り此の問題に就ては八束博士の方がえらかつたといふ如き感がする。

スペンサー先生は曰く『抑も哲學なるものは、その時代に於て各方面に於て研究せられてゐるすべての學問を包容して研究すべきもの、卽ち現代の知識なるものを悉く取集めねばならぬのである。そしてその取集めた

知識をもつて、大にしては宇宙に對し、中にしては世界に對し、小にしては國に對する人間の位置を研究するもので、知識の最高なるもの、これを哲學と稱す』と言つて居るが僕は結局哲學といふものは先生の說くところに歸着すべきものであると思つて同意を表してゐる。

今日僕の國家や、政治に對する議論の根柢は、全くスペンサー全集を通讀した結果に負ふところが多く、之れに依つて得たところは至大であると感じてゐる。例へば先生曰く、『國の政治卽ち政府そのものが既に國家の大害毒である。若し政府なしに、卽ち國家が政府の世話に

ならずに各自互に相侵さぬまでに人間が完全に進めば政府はいらないものである。然るに人間なるものは、これを距ること甚だ遠くして、常に他を害し、自ら進まんとするが如き惡い性質をもつて居るから政府の必要も起り、裁判所の必要も起り、警察署なるものを置いて守らねばならぬ必要が起つて來る。更に一歩を進めては、外國に向つて自ら守らねばならぬなどは、人間が甚だしい野獸性をもつて居るからである。この互に反噬するところの野獸性を人間が備へて居る間は、政府なくしては行かれぬ。是れ實に人類の自己の內部の性質より來る大

なる害毒である。この害毒あるが爲めに政府の必要も生ずる。そして政府の力によつて之を治めて行く。所謂毒を以て毒を制するといふことになる。語をかへて言へば、人類の所謂野獸性の最も猛烈なる病である。政府なるものは之を緩和する藥である。病があるが故に據なく藥をのむ。藥をもつて病を緩和してゐるといふ譯である。藥といふものは毒である、毒であるけれども病の毒よりも小さいから少毒を以て大毒を壓するまでで、藥はよいものではない。政府は藥でもあるが又毒でもあると考へねばならぬ。

此の原理からいふと政府萬能主義などはどうしても考へ得られないものである。政府の關係すべき事柄は、成るべく縮少せねばならぬといふことは此の原理から推して考へねばならぬ。裁判所と警察で濟むやうにせねばならぬ。そしてその次には警察がなくて濟むやうにし否裁判所もなくして仲裁裁判所の如きものを設けて穩に進みたい。』

『スペンサーの議論に感服』

『然るに事實は大にこれを裏切つて、今日我々の最も進

んだところの政治の方法として採用せる代議政體はどういふことをしてゐるかといふに、代議士を選ぶに、千人の選擧人があつて、四百九十九人と五百一人と投票のあつた場合は四百九十九人が沈默し、場合によつて壓迫せられる。肝腎の自己の代表者を選ぶ場合がさうであり更にその代議士が議場に出て事を決するにも同じく千人のうち五百一人が右と四百九十九人が左と云ふ場合少ない方の四百九十九人は屈從壓迫を甘んぜねばならぬ。抑も多數が少數を壓すといふことは、強い故に弱い者を壓する、強が弱を壓する、語を換へて言へば弱肉强食

といふことである。我々の道德觀念から言へば多數が少數を壓迫するといふことは不都合である。大人が小兒を壓迫する如く大人氣ないことで、道德に反する。五百一人の可とすることが是で、四百九十九人の可とすることが否か、何れが可であるか、勿論分るべきものでない。

斯樣に人類の道德觀念に正反對の弱肉强食、强者の横暴を認めて居る代議政體はよいものとは考へない。不合理の基礎の上に立つてゐる。『スペンサーは特にそれを論じて居る。『乍併今日ではどう考へてもいゝ方法がないから、我々の比較的最も望ましい政體として之をや

つて居るのである。斯く政府なるものが最も忌むべく恐るべきものであるに拘らず、之を必要とし、之を認めてやつてゆく以上、この位のことは忍ぶべきものかも知れぬが、道德上から見て不都合千萬で、人類はまだ〳〵この上に進んでゆくべきものである。』と、斯の如き根本論からしてスペンサーはその政治論を組み立てゝ、學問を漁りつくしたものだ。そして彼の哲學が綜合せられ成立すると、物理學、化學、經濟學等の上に之を應用して解決する。このスペンサーのゆき方は僕の學問應用上に影響する所が少くなかつた。近世の偉人であると思つてゐ

る。

『これ無くては世に立てぬ』

僕は尙ほその上に、機械學、電氣學、土木工學、測量學等總てのを全部讀みつくして、事業家としての今日の基礎をつくつた。僕は不幸にして學校には入らなかつた。學位はもつてゐないが、自分に考へて必要と思ふ學問は全部修め得て居ると考へてゐる。又これでなくては世に立てないと斷言する。如何に忙しくても事業家となるには僕のやつたことは全部必要がある。人によつてこ

まかい處までやつてほしいが、これもその人々の實力如何に依ることである。卽ち腦の包容力が大きければこまかくやり、小さければ簡單にやるだけの相違はあつても、僕のやつた筋道だけは腦裡に納めねばならぬ。

序に尙ほ學問に就て一言するが、僕は字引を引て學問をした。そして書物に就て。先づ字を知り、文章の構成を知り、文意を知るといふ順序であつたから、一寸骨が折れたがかく困難しただけ意義や知識が完全に腦裡に浸込むので、學校で先生から聞くのとは譯が遙に違ふ。苦んだものはそれだけの效能があるのである。學校の先

生は唯一般の課程の筋道だけを教へるのであるから範圍が狹い。相當の大人物とならうとするには廣く參考書を漁り、熱烈なる知識慾をもつて廣く知識を包容しないと駄目である。

近來の青年は、この點を閑却して、學問は學校で習つただけで能事終れりとし、大切の時期を一本筋の簡單なる學校教育に托して足れりとするは大間違である。自分は將來何をするかと考へ、學校にゐる時分參考書を集めて自分の目的に關係の深い知識を充分に集めるといふことが出世の準備として最も必要である。以上議論が

多岐に渉つたが、要するに出世に必要な學問として、前に述べただけのことは是非修むる必要がある。更に僕は立戻つて仕事の上に就ての準備法を語るであらう。

『勤勉であれば實力は充實する』

僕は前に仕事を熱心にするといふことを言つたが、凡そ出世をするには、先づ事業そのものを自分の趣味とし樂しみとして、一生懸命誠意を披瀝して、勉勵努力せねばならぬのである。仕事といふものを苦痛とし、勤勞を辭

して苦みと認めるが如き人は、到底出世をする資格を有しない。苟も自分が世に立つて、事業に對する總ての知識を得、實力を得ようといふことであれば、毎日〳〵自分の頭が知識をもつて、實力をもつて滿されるのが何よりの樂みであるべき筈である。それにはその人が勤勉であればあるほど實力は充實するのであるから、之を以て勤勞などと稱し苦痛とするが如き人は度外として論ずるの必要がない。

僕は前にも述べし如く、朝五時から夜の十時まで機械の側に居たが、毎日〳〵自分の頭が知識を以て充實され

るので少しもそれが苦痛でない。又字引をかゝへて本を讀んで知識を得る。今日の拙者と明日の拙者とは拙者が違ふぞ、それを何よりの樂みとして來たのである。青年が或事業に從事する場合に、最も恐るべきは、其事業の一部分の爲めに餘りに多くの時日をとらへられるといふことである。大會社になると、一人一役で、卽ちその人が購買課に入れば、熟練すればする程調法であるからいつまでもそこに置かれて、生涯それ以上に行けないことがある。製紙工場で言へば、原料を煮るところに入れば生涯そこに居て、一生原料の製造人で終らねばならぬ。

それでは大事業家にはなれない。僕の如き事業家になるには、總ての事を知悉し、購買のことでも、販賣のことでも、製造でも、何れに就ても、又何人に對しても優越力をもつてゐないと事業界の先達にはなれぬ。

僕はそれで王子製紙に入つた時、これを考へて、すべての事を研究し、他人の領分にまで立入つて啄を容れ他の部局の人達を非常に困らせて盛に議論をしたが、茲に僕の强味があつたといふのは、五時から十時まで誠意を披瀝して活動してゐる拙者だ。母親に金を送らねばならぬから、勿論給料も貰はねばならぬが、僕の目的は仕事に

あつて給料にはない。給料などのことを考へずに、誠心誠意努力してゐる拙者だ。誠意の權威は實にえらいものだ。青年はこゝをよく考へて呉れねばならぬ。僕は誠心誠意をもつてやつてゐるのだから、他の部局に啄を容れてもその部の人が反抗しない、進んで相談を受けるといふことになつて、都合よく進展して、遂には僕が萬般の指圖をする地位を贏ち得た。技師、上役と段々あるが、下役たる僕が技術の上では何にでも容啄する實權を有し得たのである。即努力に依て他人の領分に踏入りても小言も云はれず段々自分の領分を廣げて行く事に成

功したのである。

『米國でやつた努力』

僕はかうして仕事をしてゐる間に、各方面に於て種々の疑問に逢着した。日本に居つてこんなことをせず、外國に人を派し速に解決すべきであると考へ、「製紙工業論」といふ小册子を書いて澁澤子爵に提出した。それは前に述べた物理學、化學、經濟學等自分の研究した學問の力をさらけ出して御覽に入れる爲めに書いた一の策略である。僕は勿論學校に行かないのだから、先方では油さ

しの小僧としか思つて居ない。それに對して物理學も、化學も、經濟學も、研究して居るぞと云ふことを示す爲めに書いたのであるが、それが適中して、米國にやらうといふ撰拔を受けた。これは學問努力の結果で、空ではこの榮冠はかち得ない。

然るに茲に考へねばならぬことは、知識とか、威力とかによつて人の上に立つには人の反感を惹起し易い。これも愼むべきで、これに對する反省が足らぬと失脚する。僕のは誠心誠意の努力に相違ないが他の人に對しては一種の威壓であり、脅威であつたと見えて、僕が米國行を

命ぜられて、一個のトランクを携へて日本を出發したのが明治十二年のことであつたから、その頃の米國行と言へば水杯の仕事だのに、王子製紙からは一人も送つて呉れない。悄然として唯一人僕は横濱に向つた。當時淺野總一郎氏が横濱の壽町に石炭の店を出してゐて、王子製紙にも石炭を納めてゐた關係から僕を知つてゐて呉れた。僕は淺野の家に行つて晝飯の御馳走になり、午後二人で二人乘の車にトランクを乘せて出かけると、壽町の橋の上で車の心棒が折れて抛り出された。初めての洋行にこんなことがあつたので、緣起をかつぐといやな

氣持もするが、そんなことは一切顧みないで出かけた。けれども僕を一人も見送つて呉れぬといふことは如何にも心細い。何とか考慮を拂はねばならぬ、その時僕の胸中に一策が成つた。

米國に着いて製紙工場に入つて段々仕事をすると新らしい事實が發見される。此の面白い事實を他の人であれば自分の胸中に納めて日本に歸り、片ツ端からそれを出して知識の豐富を誇ることになつたらうが、僕は反對に新に得た知識を毎便殘らず十枚二十枚の紙に書綴つて本社に報告した。此の筆の力によつて日本に於け

る僕の地位が出來あがつて居らぬといかんと考へ、筆の力、報告の力によつて日本に安全なる位地を拵えて置くといふ僕の畫策で、實に報告にはよく力めたものだ。そして米國滯在中最も嬉しかつた事は、澁澤子爵から時々返事の來ることであつた。お前の報告を見ると知識も進み、事業上の目的を達し得るといふことが文字の上に歴々と見えて心强く思ふといふやうなことが書いてある。あの忙しい人が叮嚀懇切に數十枚も書いて呉れた。これが忘れることの出來ぬ愉快で、報告の威力が成功したためと考へた。かくて一年半ばかりして米國から歸

つた。そして横濱に上陸すると、今度は大分多勢が出迎へて、報告に對する禮を述べられた。そして其直ぐ翌日から工場に出てドン〳〵働いたが、それまで困難であつた問題も、僕が歸ると同時に解決されて、半歳位のうちに生產は三倍になり、僕は一躍副支配人に拔擢せられた。

『余の洋行論』

玆に一言して置くが、僕はこの時米國に一年半滯在したが、嘗つて一晩でもホテルに泊つたことがない。どうするかといふに米國にはBoarding houseと言つて下宿屋

がある。行く先々でこの下宿屋を求めて泊り、ホテルの如き贅澤のところには一度も泊らずに押通したなど、今の人達には出來ぬことであると考へてゐる。又その時分の米國人も、今の米國人と違つて基督教の信仰力が強く、一視同仁の心をもつて日本人を非常に可愛がつて呉れ、門戸を開放して直ちに工場に入れ、日に一弗廿五仙づつも小僧に呉れて種々と便宜を授けて呉れた。

序に僕の洋行論を一言すれば、凡そ日本人の洋行するといふことは、自分の技術關係上の調査の爲め、或は學問の研究といふが如きことであるが、僕の經驗から考へる

と、何も知らぬ人が唯だ漠然として外國視察に行き若くば一つの事業を目的として、その事業を研究しようとして行つても何の役にも立たぬのみか、却つて害になる。米國に於て見せられるものは完全なる健康體の事業であるが、我々のしてゐる仕事は故障續出する病體である。健康體だけを見て來た人には病體の取扱は出來ぬ。僕は日本の病的事業の病氣の徴候を自ら書きとめて藥の盛り方を研究に行つたのであるから立どころに解決がついたのである。それで事業を始めて、困難や故障が起つたならば、その解決をする爲めに飛んで行つて手當法

を研究するのが一番悧巧である。非常に健全に働いてゐるものを拜見して來ても何にもならぬ、洋行するものは日本で段々苦心して、故障を見て、その解決を求めに行くものに於て、初めてその效果の大を望み得るといふのが僕の持論だ。先方に行つて、毎日々々問題の解決がついて來て、自分の頭が新らしい知識をもつて充實して來ると、早く日本に歸つて之れを實行して見たいといふ考が誰しもの頭に起つて歸心矢の如くなるものだ。故に僕考ふるに米國などに行つて、三年も五年も故郷の困難を閑却してボンヤリしてゐる如き人はコンマ以下の腦

髓をもつた人で、そんな人をあてにして仕事を始めると大間違を起す。新知識で頭が充實すると薄ボンヤリとして外國などに居られるものでない。

左樣な理窟で、外國に行つて新知識を得て來る。歸ると忽ち之を實行する。三四年の間に悉皆仕事をして了ふと又外國に行つて新らしいものを見て歸つて實行する。半歲、一年とその後僕は七回洋行した。そして若い時代の半生涯を旅行に送つた如き氣分がする。知識を外國に求むるといふ方が、自分に研究するよりも手ッ取り早い。今日の如き交通の便利な時代はことにそれが

無雜作に出來る。僕の最初に行つた明治十二年と、今日とは非常な相違だ。從つて日本で事業をするものは、外國と盛に交通して、長居は害があるから一寸行つて見て、歸つて實行に力むべきであると考へる。

左樣の意味で僕は事業の研究のみに、一日も空しくせずに努力した。事業に對する知識慾が盛であるから他を顧みない。華盛頓などに人は行くが、紙に關係のない處に用はないから僕は一度も行つたことがない。今日になつて考へて見ると、華盛頓を知らぬといふことは、僕が如何に仕事の急所を突いた働きをしたかといふこと

を示すもので、僕は一擧一動急所を突いた働きをしたいと考へ、米國滯在中も、芝居を見ぬは勿論、ホテルにも泊らぬ。が然も如何なる山奥でも紙の仕事をしてゐる處へは足跡到らざるなしだ。

『第一は學問第二は誠意努力』

前來說き來つたところを約言すれば、出世をするには必要なる學問をすること、學問の力なくして出世は到底出來ない。紛れ當りに出世する人もあるが、それは天才であるか、或は僥倖である。僕は運とか天才とかを別と

して、何人も出世する道を考へて見たい。第一に學問、第二に誠意努力。これは實に偉大なる力をもつたもので、此の心懸をもつて進めば何人も出世をする。玄關番の居候としても、僕は出世學上の學術的居候であつた、僕は學問をする方法に就ても、自分が勤をする心懸でも總て出世學の法則に合する方法で進んで來たと思つてゐる。

世人稍もすれば大川は金を溜めると言ひ、そしてその金をためるといふ意味を、唯だ單に無闇に金をためる守錢奴の意味に解釋するが、これは非常なる誤解である。金といふものは僕の眼から見ると一の機械に外ならぬ。

世間の人の如く所謂お實とは見ない。全然機械の一部分だ。これなくしては機械の運轉も何も出來ない。僕の有してゐる幾萬馬力の力は金の力によつて動かせる萬能の力をもつ金だ。守錢奴が金を拵えてその利を見て樂むのとは全然その行方が違ふ。金がなくては仕事が出來ぬ。機械なしに物の製造の出來ぬと同じ理窟だ。仕事をしてゐるうちに、その副產物として金は繁殖し、それが更に偉力を加へつゝ進んで行つて、知らず識らず事業が大きくなる。僕は仕事をしやうとしては進むが、未だ曾つて金を儲けやうとして進んだことは一度もない。

斯の如くにして段々加はり加はつて、今日では僕の從事せる會社數は六十に垂とし、公稱資本が三億五千萬圓に達してゐる。けれども本來事業そのものを目的として金を目的としてゐない。事業をやつてゐるうちに尨大となつたのである。そして此の大資力が、何をしてゐるかといふに、地上のもの、又は地中のものをとらへて人間に必要なる物質に變化させる、といふ事業に、全部從事してゐるのである。所謂富源なるものを充分に洞察して、富そのものに變化せしむる作用を爲してゐるのが此の資本である。そして之に依つて全然價値のない品が有

價値のものとなり、その作業を爲す爲めに殆んど十幾萬人といふ人が生存して居るのである。その働たる頗る偉大なるもので金を貸して利を取るとは全然趣を異にし、人類の利便に貢獻すること固より同日の論ではない。卽ち資力の働きによつて無益のものより有益のものに變形せしめ、その利益の一部分はこれを株主に配當し、自分にも或部分を受ける。拙者の金を得る爲めに他人が損失を受けるといふことはないのである。此の偉大なる働を爲す機械は卽ち金である。僕の手に來る金なるものは、全部これを機械化するのである。世の人が金な

るものを見るに、少し違つた眼を以てせねばならぬと思ふ。否金なるものをも少し違つた方面に活用せぬといかぬ。僕の手に歸した金が、眞實の働きをしてゐると思ふ。

『金の力と腕の力』

最後にもう少し金といふことに就て青年諸君に一言する必要がある。僕が金の力といふことに就て深く悟るところのあつたのは、澁澤先生のところに書生をしてゐる時、將棊の相手をしてゐると、先生は、金の力と腕の力

とが併行せぬと駄目だと語られ、金は三千圓たまるまでには苦心を要するが、その先になると案外樂だといふお話であつた。先生はお忘れになつたであらうが、これは明治十年頃の話で、金利が一割二分から一割五分もした時代のことで三千圓の金があれば一年に三百六十圓の利息がつく、月に三十圓と言へば既に立派な人物の月給と同じである。役人だと同じ月給をとつても着物や、食物や、妻君がいるが金の方は利息がその儘に殘る。えらいものだと考へ、機械卽ち金を集めることに全力を注ぐ必要のあるといふことに就て悟るところがあつた。そ

の澁澤先生の坐談が僕の今日の大を成した一つの動機にもなつたと考へる。卽ち澁澤先生の坐談なるものが、僕の今日の運命を開いたかも知れない。

かう考へると、苟も世に立つて出世をしようとする者は、如何なる鎖細なことでも漫然と聞き流してはいかん。今日の僕の樺太の仕事は隨分大きな事業になり、七八千萬圓の資本を投じて鐵道、製紙と力を惜まず樺太開發の事業に從事して有望な事業になつてゐるが、そのもとは樺太は全島悉く森林だといふことを汽車中で一寸耳にはさんだのが動機である。これが僕の運を開いたとす

ると運はいつも吾人の前を通過してゐるものだ。それをとらへると否とは一に眼力と注意力如何で、運を捉える觀察力を有するものが勝つのである。僕の今日が運によつて寢てゐて湧き出たものではない。出世するには他に祕訣はない。通常一般に人がして居る如き事を普通と同じやうにしてゐたのでは普通人以上の人にはなれない。人より以上の努力をしてこそ人より以上の成功をするものだ。これは千古一樣の理である。若し此の誠意と努力とを別にして出世をするにはどうしたならばよいかと問ふ青年があつたならば、木に緣りて魚

を求むるの類である。

大川先生出世物語　終